

崩壊の10日間

親友と理性を失う性的治験記録

第1話：契約の罟	2
第2話：観察される屈辱	16
第3話：親友との境界線	34
第4話：限界の連鎖	56
第5話：快楽の深淵	81
第6話：視線の牢獄	106
第7話：口腔の屈服	126
第8話：内側からの侵食	152
第9話：理性の臨界	179
第10話：理性の終焉	209
エピローグ	233

第1話：契約の罠

通帳の残高を見て、健太は小さく息を吐いた。

三千円。

就活に必要なスーツのクリーニング代すら払えない。交通費で消える。面接が三社控えている来週、どうやって乗り切ればいいのか。

「なあ、健太」

隣で同じように画面を覗き込んでいた拓海が、スマホを突き出してきた。

「これ、どう思う？」

画面には求人サイトの広告。『高額報酬・治験ボランティア募集。10日間で50万円』

「……治験？」

「そ。新薬のテストってやつ。友達が前にやって、マジで50万もらったって」

拓海の声は軽い。いつもの調子。でも健太は、その奥に自分と同じ焦りを感じ取った。こいつも金がないんだ。

「でも、副作用とかあるんじゃ」

「書いてあるよ。『安全性確認済み・重篤な副作用なし』って。大手製薬会社だし」

健太は画面を見つめた。50万円。それだけあれば、就活を乗り切れる。いや、それどころか当面の生活費まで確保できる。

「……俺、応募してみようかな」

拓海が顔を上げた。

「マジで？」

「うん。拓海も一緒に、どう？」

言ってから、健太は自分が何を口にしたのか理解した。親友を、よくわからない治験に誘っている。でも、一人で行くのは怖い。

「……いいよ。一緒に行こう」

拓海が笑った。いつもの、軽い笑顔。

健太は胸の奥で小さな罪悪感を感じたが、それを振り払った。大手企業の治験だ。問題ないはずだ。

三日後、健太と拓海は都心の高層ビルの一室にいた。

製薬会社「ファーマ・ライフ」の受付は、清潔で洗練されていた。白い壁、消毒液の匂い、静かなBGM。

「山田健太様、佐藤拓海様ですね」

受付の女性が微笑んだ。機械的な、完璧な笑顔。

「説明会にご案内します」

案内された部屋には、すでに数人の男性がいた。みんな20代前半に見える。同じように金に困った学生たちだろう。

健太は拓海の隣に座った。

「意外と人いるんだな」

拓海が小声で言った。

「そりゃ、50万だもん」

そのとき、ドアが開いた。

白衣を着た30代くらいの男性が入ってくる。眼鏡の奥の目は冷たく、表情に感情が見えない。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。私、研究主任の柴田と申します」

淡々とした声。

「これより、治験の内容についてご説明いたします」

柴田はプロジェクターを操作した。スクリーンに資料が映る。

「今回の治験は、弊社が開発した新しい健康補助食品の安全性確認です。期間は10日間。その間、弊社の施設に宿泊していただき、定期的に検査を行います」

健太は資料を見た。『天然成分配合・疲労回復・活力増進』と書いてある。

「副作用は？」

誰かが質問した。

「現時点で重篤な副作用は確認されておりません。軽度の体温上昇、発汗、軽い興奮状態などが報告されていますが、一時的なものです」

柴田は感情のない声で答えた。

「報酬は50万円。ただし、途中辞退の場合は違約金が発生します。また、治験内容については守秘義務契約を結んでいただきます」

健太は拓海を見た。拓海も健太を見ていた。

「……大丈夫そうだな」

「うん」

二人は頷き合った。

「それでは、参加を希望される方は、こちらの契約書にサインをお願いします」

柴田が書類を配る。

健太は契約書を読んだ。専門用語が並んでいて、正直よくわからない。でも、報酬額だけははっきりと書いてあった。『500,000円』

ペンを握る手が少し震えた。

サインした。

拓海もサインした。

他の参加者たちも、次々とサインしていく。

「ありがとうございます」

柴田が書類を回収した。

「それでは、本日はこれで解散とします。明日の午前9時に、こちらにお集まりください。宿泊の準備をしてお越しください」

健太と拓海は受付を出た。

エレベーターの中で、拓海が言った。

「なんか、あっけなかったな」

「そうだね」

「でも、これで50万だぜ。ラッキーだったかも」

拓海が笑う。

健太も笑った。

そのとき、胸の奥に小さな不安がよぎったが、健太はそれを無視した。

翌朝、健太と拓海は再びビルを訪れた。

受付には柴田と、もう一人若い男性がいた。

「おはようございます。私、助手研究員の宮本です」

宮本は柴田よりは人間味のある笑顔を見せた。

「それでは、施設にご案内します」

エレベーターで地下に降りる。

地下2階。ドアが開くと、そこは病院のような廊下だった。消毒液の匂いが強い。

「こちらが宿泊室です」

案内された部屋は、ビジネスホテルのような簡素な作りだった。ベッドが二つ。

「健太さんと拓海さんは、こちらのお部屋を共有していただきます」

「あ、はい」

健太は荷物を置いた。

「それでは、30分後に実験室にお越してください。場所はこちらの地図を」

宮本が紙を渡した。

「着替えもこちらに」

白い患者着のようなものが置いてあった。

「では、後ほど」

宮本が出て行った。

ドアが閉まる。

拓海がベッドに座った。

「なんか、本格的だな」

「うん」

健太は着替えを手にとった。薄い布地。

「……これ、下着の上から着るのかな」

「さあ？ 指示なかったから、たぶん直接じゃね」

二人は顔を見合わせた。

「まあ、検査あるだろうし」

「そうだよな」

健太は背を向けて着替えた。拓海も同じように。

患者着は思ったより薄く、体のラインが透けそうだった。

「……なんか恥ずかしいな、これ」

拓海が苦笑した。

「同感」

30分後、二人は実験室に向かった。

実験室は、想像以上に本格的だった。

医療機器が並び、モニターが何台も設置されている。中央に診察台のようなベッドが二つ。

「お待ちしております」

柴田が立っていた。白衣の下から冷たい視線。

「それでは、治験を開始します。まず、こちらの錠剤を服用してください」

柴田が小さな錠剤を差し出した。

健太は受け取った。白い、普通の錠剤に見える。

「水はこちらに」

健太と拓海は錠剤を飲んだ。

「服用完了を確認しました。それでは、こちらのベッドに横になってください」

健太は言われた通りにベッドに横たわった。隣のベッドには拓海。

「これより、バイタルサインの測定を行います」

宮本が機器を持ってきた。心電図の電極を胸に貼り付ける。体温計を脇に挟む。血圧計を腕に巻く。

「……なんか、大げさだな」

拓海が小声で言った。

「詳細なデータ取得が必要ですので」

柴田が淡々と答えた。

健太は天井を見つめた。何も起こらない。

5分が過ぎた。

そのとき、健太は気づいた。

体が熱い。

いや、熱いというより、妙な感覚。体の奥から何かが湧き上がってくるような。

「……あれ？」

拓海の声。

「どうかしましたか？」

柴田が近づいてくる。

「なんか、体が……」

「予想通りの反応です。では、ここで重要なお知らせがあります」

柴田が資料を取り出した。

「先ほど服用していただいた薬剤ですが、正確には『性的興奮剤』

の試作品となります」

健太の頭が真っ白になった。

「え……？」

「契約書の12条3項に記載されております。『被験者は、製品の真の性質について事後的に通知されることに同意する』

と」

「ちょっと待って！ 健康補助食品って」

「その側面もございます。性的活力も健康の一部ですので」

柴田の声は変わらない。

「ふざけんな！ そんなの聞いてない！」

拓海が起き上がろうとした。

「お待ちください。契約書にサイン済みです。途中辞退の場合、違約金500万円が発生します」

500万円。

健太の思考が止まった。

「さらに、守秘義務違反で外部に情報を漏らした場合、刑事告訴の対象となります。契約書の18条に明記されております」

「そんな……」

健太の声が震えた。

「ご安心ください。身体に危険はありません。ただし、性的な反応が発生します。それを測定させていただきます」

柴田がタブレットを操作する。

「すでに薬効が現れているようですね」

健太は自分の体を見た。

患者着の股間部分が、膨らんでいた。

いや、違う。勃起している。

薬のせいだ。でも、止められない。

「あ……」

健太は顔を背けた。恥ずかしい。こんなの、見られたくない。

「佐藤さんも同様ですね」

柴田が拓海の方を見た。

拓海も、股間を手で隠そうとしている。

「では、測定を開始します。患者着を脱いでください」

「え……！」

「バイタルデータと性器の反応を記録する必要があります」

「そんな……」

健太は拒否しようとした。でも、柴田の目は冷たかった。

「契約違反となりますが、よろしいですか？」

500万円。払えない。

健太は震える手で、患者着を脱いだ。

全裸。

研究員二人の前で。

親友の前で。

健太は顔を覆いたかったが、手は体の横に置くように指示された。

「こちらを見ないでください」

柴田が淡々と言う。

「性器の測定を行います」

宮本が定規のようなものを持ってきた。

「サイズ測定です。直立状態で……」

冷たい定規が、健太の勃起した性器に当てられた。

「長さ、17センチ。太さ、4.2センチ。記録」

宮本がタブレットに入力する。

健太は羞恥で死にそうだった。

数値化される。自分の性器が、データとして記録される。

「次に、佐藤さん」

拓海の方からも、同じような声が聞こえた。

「15.8センチ。3.9センチ。記録」

健太は目を閉じた。

拓海のサイズまで知ってしまった。聞きたくなかった。

「それでは、反応速度の測定を行います」

柴田が言った。

「刺激を与え、射精までの時間を計測します」

「ちょっと……！」

「データ取得に必要です」

宮本が手袋をはめた。

そして、健太の性器を握った。

「あ……っ」

声が出た。

他人に触られる感覚。しかも男性に。しかも研究員に。

宮本の手が動き始めた。

機械的な、一定のリズム。

「や、やめて……」

健太は懇願した。

「もうすぐ終わります」

宮本の声は優しくかったが、手は止まらない。

薬のせいで、感度が上がっている。

すぐに限界が来た。

「あ……だめ、出る……」

「どうぞ」

柴田がカップを差し出した。

「っ……！」

健太は射精した。

カップの中に。

研究員の前で。

拓海の前で。

「射精確認。時間、3分22秒。量は……」

宮本がカップを測定する。

「12ミリリットル。記録」

健太は放心していた。

何が起こったのか、理解できない。

「次、佐藤さん」

拓海の方からも、同じような音が聞こえた。

喘ぎ声。

拒否の声。

そして、射精の音。

「2分58秒。15ミリリットル。記録」

健太は顔を背けた。

見たくない。

親友が、同じ目に遭っている。

自分が誘ったせいで。

「本日の測定は以上です。お疲れ様でした」

柴田が言った。

「明日も同様の測定を行います。午前9時に実験室にお越しください」

健太と拓海は、患者着を着て、部屋に戻った。

部屋に戻ると、二人は無言だった。

拓海がベッドに座る。

健太も座る。

何を言えばいいのかわからない。

「……ごめん」

健太が言った。

「え？」

「俺が、誘ったから……」

「バカ。俺も自分で決めたんだから」

拓海が苦笑した。いつもの、軽い笑顔。でも、目は笑っていない。

「でも……」

「気にすんな。10日だろ？ なんとかなるって」

拓海が肩を叩いた。

健太は胸が痛かった。

拓海は強がっている。でも、怖いはずだ。

自分も怖い。

明日、また同じことをされる。

いや、もっとひどいことをされるかもしれない。

「……10日、頑張ろう」

「おう」

二人は拳を合わせた。

でも、その夜、健太は眠れなかった。

天井を見つめながら、考えた。

逃げたい。

でも、500万円は払えない。

契約書にサインした。

自分の意思で。

拓海を巻き込んだ。

罪悪感が胸を締め付ける。

隣のベッドから、拓海の寝息が聞こえた。

寝られているのか、それとも寝たふりか。

健太は目を閉じた。

明日が来る。

また、あの実験室に行く。

また、測定される。

データとして記録される。

健太は小さく震えた。

そして、ようやく浅い眠りに落ちた。

(第1話 完)

第2話：観察される屈辱

目が覚めた瞬間、健太は違和感に気づいた。

下半身が熱い。

いや、熱いだけじゃない。張っている。

布団をめくると、股間が膨らんでいた。朝勃ちではない。薬のせいだ。昨日の薬が、まだ体内に残っている。

「……最悪だ」

小さく呟いた。

時計を見る。午前7時。実験開始まで2時間ある。

隣のベッドを見た。拓海はまだ眠っている。いや、寝たふりかもしれない。

健太はベッドから起き上がった。股間の膨らみが恥ずかしくて、すぐにズボンを履く。でも、勃起は収まらない。

トイレに行った。

用を足そうとしても、勃起していて上手くいかない。無理やり角度をつけて、なんとか済ませた。

鏡に映る自分の顔は青白かった。

昨日のことが、フラッシュバックする。

全裸にされた。

性器を測定された。

射精させられた。

データとして記録された。

健太は顔を洗った。冷たい水が気持ちいい。でも、不安は消えない。

今日も、同じことをされる。

いや、もっとひどいことをされるかもしれない。

部屋に戻ると、拓海が起きていた。

「おはよう」

「……おはよう」

二人とも、ごちない。

昨日のことを、どう扱えばいいのかわからない。

「朝飯、来るのかな」

拓海が言った。

「たぶん」

しばらくして、ノックの音がした。

「失礼します」

宮本が入ってきた。トレイに朝食を載せている。

「おはようございます。朝食をお持ちしました」

「あ、ありがとうございます」

健太は受け取った。

トレイには、パン、サラダ、スープ、そして小さな錠剤。

「こちらの錠剤も、お忘れなく」

宮本が微笑んだ。

健太は錠剤を見つめた。また、これを飲むのか。

「……これ、昨日と同じですか？」

「はい。継続的な投薬が必要です」

宮本の声は優しい。でも、拒否はできない。

健太は錠剤を飲んだ。拓海も同じように。

「それでは、9時に実験室でお待ちしております」

宮本が出て行った。

二人は無言で朝食を食べた。

食欲はなかったが、食べないと体がもたない。

「……なあ」

拓海が言った。

「ん？」

「昨日さ、測定されたじゃん」

「うん」

「あれ、マジで恥ずかしかったよな」

拓海が苦笑した。

健太は頷いた。

「ごめん、俺が誘ったから」

「だから、気にすんなって」

拓海が肩を叩いた。

「俺も自分で決めたんだから。それに、あと8日だろ？ なんとかなる」

拓海の声は明るい。でも、目は笑っていない。

健太は胸が痛んだ。

拓海は強がっている。

自分のせいで。

午前9時、健太と拓海は実験室の前にいた。

ドアが開いた。

柴田が立っていた。白衣、眼鏡、冷たい視線。

「おはようございます。本日の実験を開始します」

淡々とした声。

「昨日は全体的な反応測定でしたが、本日はより詳細なデータを取得します」

柴田がタブレットを操作した。

「具体的には、各部位の感度測定を行います」

「各部位……？」

健太が聞き返した。

「乳首、性器、肛門などの性感帯を、個別に測定します」

健太の顔が青ざめた。

「ちょっとまって、肛門って……」

「性的興奮剤の効果を測定するには、全ての性感帯のデータが必要です」

柴田の声は変わらない。

「それでは、山田さんは実験室A、佐藤さんは実験室Bへ移動してください」

「え、別々……？」

拓海が声を上げた。

「個別測定のため、分離します」

「そんな……」

健太は拓海を見た。拓海も健太を見ていた。

二人だけなら、まだ耐えられる気がした。でも、一人きりになるのは怖い。

「では、宮本君、佐藤さんを実験室Bへ」

「はい。佐藤さん、こちらどうぞ」

宮本が拓海を連れて行った。

拓海が振り返った。

健太も手を振った。

でも、すぐに見えなくなった。

「山田さん、こちらです」

柴田が別の扉を開けた。

健太は従った。

実験室Aは、昨日の部屋よりも狭かった。

中央に診察台のようなベッド。周囲に医療機器。カメラが複数設置されている。

「まず、患者着を脱いでください」

柴田が言った。

健太は従った。もう抵抗する気力がない。

全裸になる。

柴田の視線が、健太の体を走査する。

データとして見ている。人間としてではなく。

「ベッドに仰向けに横になってください」

健太は横たわった。